



# 上海社会科学院主催 国際学術研究会に参加して

日時：2017年7月18・19日

内田 青蔵（非文字資料研究センター長）

## 1 はじめに

上海社会科学院と本非文字資料研究センターとの交流は数年前から行われ、2014年には上海社会科学院の現所長である王健氏と社会科学院研究員葛濤氏が本センターに表敬訪問に来られ、その縁で筆者も2015年7月に上海社会科学院主催で行われた国際学術研究会「国際視野中的都市人文遺産研究及保護」に招聘され、報告を行った。

今回は、その2回目の国際学術研究会「跨学科背景下的城市人文遺産研究及保護」が、2017年7月18・19日の2日間にわたって開催された。今回も招聘を受け、発表と討論会に参加した。本稿はその報告である。

上海社会科学院は、上海だけではなく中国を代表する文字通りの社会科学の拠点で、近年、現代都市の問題に関しても強い関心を抱き、社会科学的観点から都市問題を探る国際シンポジウムを開催している。非文字資料研究センターでは、様々な非文字研究を展開しているが、そのひとつに租界研究がある。日本が中国や朝鮮半島に拓いた租界地の研究であり、租界地成立の歴史的背景はもとより、経済活動や人的活動、あるいは、建築の様相など多様な角度から研究を進めてきた。こうした成果もあって、上海社会科学院との交流が始まった。筆者は本学の拠点となる横浜が居留地として栄えた都市であることを受け、2015年の1回目には、横浜の近年の都市づくりの動向と建築保存に関する動きを紹介し、今回の2回目は「横浜にみる歴史的建造物の保存手法—保存手法としての伝統工法の“曳家”の導入—」と題し、建築保存の具体的方法について発表を行った。

## 2 国際討論会の概要

7月18日の初日は、午前・午後を通して21名がそれぞれの観点から研究発表を行い、翌19日は、上海の研究者5名による討論会が行われた。

21名の発表者は多様で、日本からは筆者と京都大学の地理学を専門とする小方登教授、アメリカからはノースウェスタン大学のPeter Carroll教授ら4名、オーストラリアからはニューサウスウェールズ大学建築学院のXing Ruan教授ら2名、フランスのリヨン東アジア研究所の尹冬茗氏1名、デンマーク1名、ベルギー1名、アイルランド1名などであった。発表内容も都市の歴史的考察から建築の保存状況や都市の再開発に関するなど多様であった。例えば、京都大学の小方教授は「衛星画像を利用したユーラシアにおけるアジア歴史都市と集落の立地とプランの類型化」と題する発表で、衛星画像を利用して未開の都市遺跡や河川や道路などの遺構を辿るという壮大な研究とその成果発表であったし、また、フランスのリヨン東アジア研究所の尹冬茗氏は「漢口租界と新都市パターンの導入」と題する発表であった。また、ベルギーのCharles Lagrange氏は「The art deco buildings built by the French Architects Leonard & Veyseyre in the former French Concession」と題して発表を行った。ちなみに、上海はアール・デコ建築の宝庫といわれ、その中心となる建築家としてハンガリー出身のラズロ・ヒューデックが知られている。この発表は、こうしたヒューデック研究に片寄った上海のアール・デコ建築研究の見直しでもあり、個人的には興味深いものであった。発表時間はそれぞれ15分と短いものであったが、簡単な質疑も行われ、また、2日目の最後には中国の研究者たちによる多岐にわたる研究発表に関するコメントと都市問題に関する討論会が行われ、幕を閉じた。

## 3 「横浜にみる歴史的建造物の保存手法—保存手法としての伝統工法の“曳家”の導入—」の概要

筆者は、わが国の歴史的建造物を中心とした都市再生事業の最先端事例として横浜の関内エリアで行われてい

る歴史的建造物の保存再生事例を紹介し、次に、建築保存再生の方法としての近年注目すべきものとして古くから用いられてきた“曳家”の導入の紹介とその可能性について報告した。

すなわち、歴史的建造物の保存再生は、とりわけ地価の高い都心部では土地の有効利用という経済性と直接係る問題もあり極めて難しいものである。そのため、横浜では、経済的ロスをできるだけ最小限にしつつ、歴史性・文化性を継承する方法として採用されてきたのが「外壁保存」という方法であった。これは路上を歩く人々の目線からの景観保存を重要視した方法といえる。ただ、この方法は景観の保存という都市景観上は保存再生が可能となっても、建築側から見ればその建築の持つ内部空間は存在せず、外部意匠だけが保存されただけという問題を残していた。

こうした中で、近年注目されているのが“曳家”であった。建物を本来の敷地と切り離してしまうという問題は残るが、それでも、曳家により土地の有効利用を可能とし、かつ、歴史的建造物をそのまま保存し、また、再生できる。横浜では、1929年竣工の旧第一銀行横浜支店（最終的には横浜銀行本店別館）の建物の保存のために、120メートルほど曳家を行った。現在は、公益施設—BankART 1929 Yokohama—としてその優雅な姿を今に伝えている。こうした最先端事業としての歴史的建造物を保存再生する方法として、伝統的技術が見直され、再利用されている点は極めて興味深い。この曳家

という方法は、石造文化圏では存在しなかった。こうしたわが国の伝統方法が、世界の保存再生の方法として採用される可能性は高いものと思われるし、世界にこうした情報を積極的に紹介したいと考える。



BanKART1929 Yokohama（下層部分が曳家された部分）

#### 4 むすびにかえて

なお、こうした交流もあって、本センターと社会科学学院との間で、研究交流の提携を結ぶこととなった。本年10月28日に本学で開催された公開研究会「上海租界と外国人社会について」のパネラーとして上海社会科学院所長の王健氏が来日したため、同日、学術交流の提携書に署名をいただき、無事、学術交流の調印を終えた。今後、本学でも中国研究がますます盛んに行われる可能性が高く、これを機に社会科学学院との研究協力や共同研究を積極的に進めていただければ幸いである。



2017. 07. 18 当日の参加者の記念写真